

るのであるから、手堅い方法といえる反面、著者の目ざす課題は、作者の構想意識の追求という、語句のみではつつみ切れぬ課題であるから、考察の対象の広がり在今后に期待したいところである。また、『浜松中納言物語』を『源氏物語』の単なる模倣ではなく、新たな文学の創造であると位置づけておられるが、今回の書では構想を中心にとりあげられ、この点には深く触れられていない。文学史的な位置づけとも関わって、どのような見解を持たれるのか、興味をおぼえるところである。著者の今後の論文が期待される。

(昭和58年9月15日、大学堂書店刊。定価二一〇〇円)
(ばん・としあき 本学教授)

本学の日文学専攻科も、構成する専任のメンバーが、ここ数年の間

にかなり変わってしまった。一昨年春、故鷹津義彦先生の後任として、芦谷信和先生がご着任になられ、近代文学の分野が、新しい展開を見せはじめて、一年後に、今度は森本修先生の後任として、昨年四月より、新たに上田博先生を迎え、更に

立命・日本文学の学風の樹立について
松前 健

の日本文学専攻は、他大学よりまして、多士済々

一層の充実を見ることになった。これは、本学および日本文学会の発展のためにも、ご同慶に堪えないところである。

上田先生は、やはり近代専攻で、気鋭の学究であり、本学出身者で、会員の方々もよく熟知されているところである。

それから、水田潤先生が、昨年末、その御専攻の近世文学の御研究がみのり、文学博士の学位を取

得されたことも、本学・本学会の地歩を、一層高める慶事として、会員一同喜びに堪えないところである。心からお祝いを申し上げたい。こうしたことから見ても、本学の日本文学専攻は、他大学よりまして、多士済々

の陣容となった。それぞれの特色ある学殖と方法論をもって、教学に当り、また学界の大きな星となっている。

文学研究の方法はさまざまある。然しそのどれが正しく、どれが誤っているというようなものではない。それぞれが文学の本質解明と

いう、一つの目標に進む、違った道程にすぎない。

偏見や、狭量な排他主義は本学にはない。それぞれの長所を、互いに汲み取りながら、みな堅実に客観的な実証性と、豊かな創造性、それに幅広い視野をもって、その研究領域を広げ、展開させている。本学・本学会は、ここで立命学風ともいふべき、一つの大きな学風を、樹立・発展させるべき気運をはらんでいるのである。